Hassojitz

総合商社 双日
未来を創造した先駆者たち

第1巻

創業

sojitz 双日株式会社

本作品は、関係する企業や団体の史料を基に当社独自の視線で
描いた歴史物語です。可能な限り史実に基づいて作成していますが、
構成上、マンガ特有の表現、描写を用いている部分があります。
また、登場人物の台詞は、基本的に各史料から引用していますが、
一部推測により作成しています。

嘉永六(一八五三)年
ペリー来航

このとき
二〇〇年以上に及ぶ
鎖国の影響で日本は
世界から完全に
取り残されていた

アメリカ合衆国
東インド艦隊司令長官
マシュー・ペリー

ペリーは
将軍への贈り物として
蒸気機関車のミニチュア
を献上し

日本側からは
絹織物、漆器、陶磁器などの
伝統工芸品が贈答された

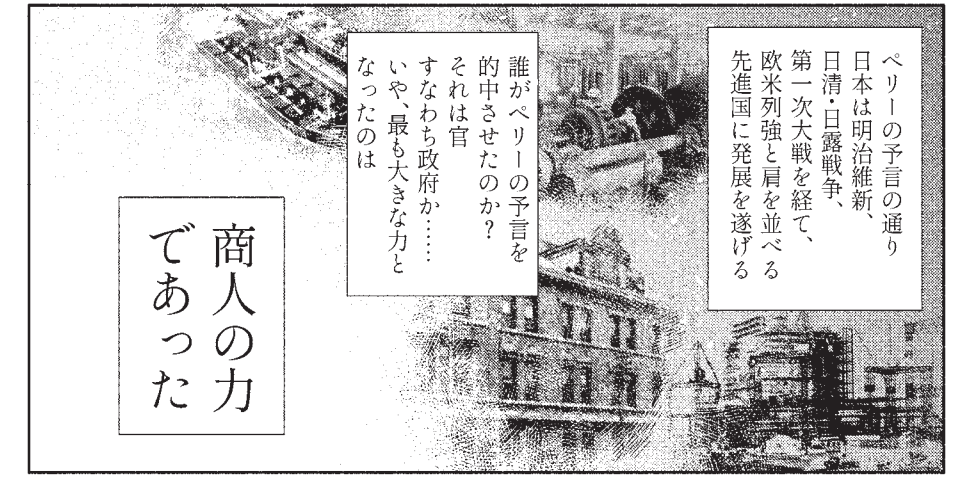
わあ
わあ

日本は野蛮人の国だな

先進国・アメリカ
との差は明らかだ
……ふんっ

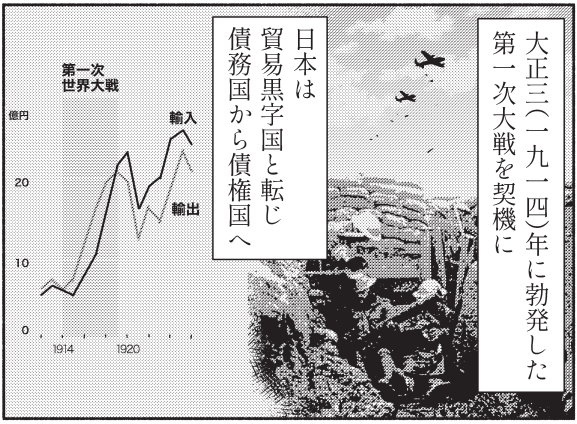
「日本は、最も成功している工業国に遅れをとったままではいないだろう。彼らの好奇心と適応力、敏速さ(…)世界で最も恵まれた国々と並ぶ水準にまで押し上げるであろう。ひとたび文明世界の過去及び現在の技能等を手に納めたら、日本人は、将来機械工業の成功をめざす競争に、強力な競争者として加わるであろう。」

『ペリー提督日本遠征記』より



大正三(一九一四)年に勃発した第一次大戦を契機に

日本は貿易黒字国と転じ債務国から債権国へ



日本が開国後
もっとも輝いた
この時期を牽引した
3つの企業群こそが
双日の源流——

鈴木商店

日本一の総合商社に上りつめ
製造業を中心に
80もの事業会社を設立

岩井商店

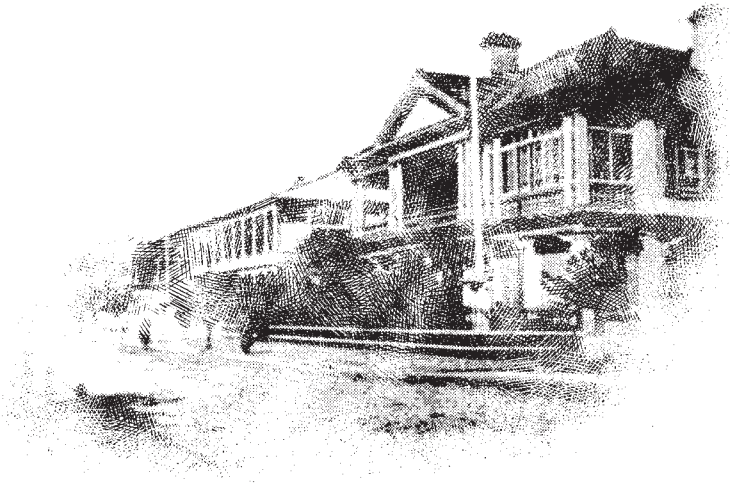
輸入品の国産化を強力に推し進め
のちに最勝会とよばれる
製造事業群を次々と立ちあげた

日本綿花

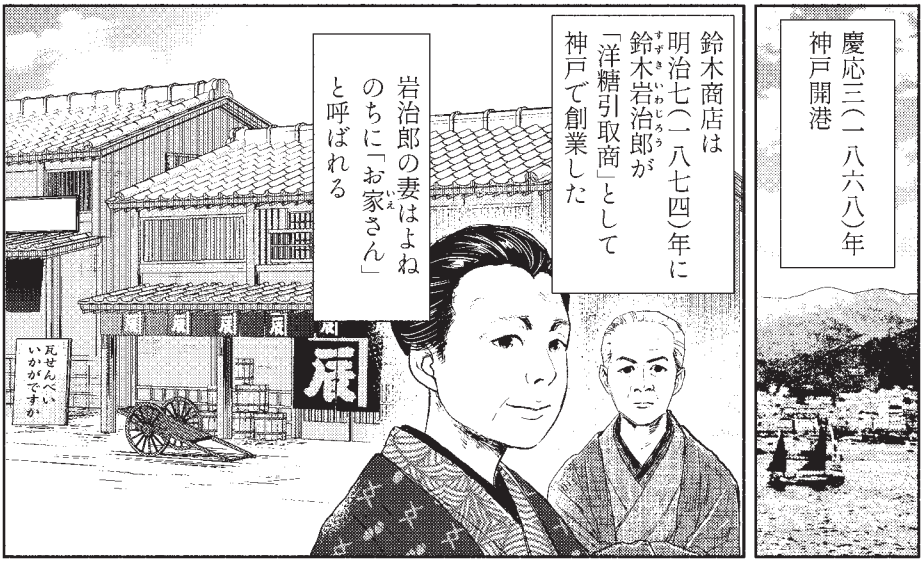
当時最大の産業であった紡績業に
世界中から原料である綿花を調達
製品である綿糸・綿布を輸出し
膨大な外貨をもたらした

彼ら双日の先人たちは
溢れる起業精神と
発想実現力で
多彩な事業を展開し
次代を見据えてきた……
そのDNAを受け継ぐ、
双日とは何者なのか――
これは
その本質を探る
物語である
sojitz
Hassojitz
発想 × sojitz

第1章　屈辱の神戸居留地貿易



岩井勝次郎、鈴木よね、金子直吉
～若き日の先駆者たち


慶応三(一八六八)年
神戸開港
鈴木商店は
明治七(一八七四)年に
鈴木岩治郎が
「洋糖引取商」として
神戸で創業した
岩治郎の妻はよね
のちに「お家さん」
と呼ばれる
瓦せんべい
いかがですか

そして
土佐から丁稚として
入店したのが二〇歳の
金子直吉である
金子直吉やき
今日から
お世話に
なりますき
金子直吉は土佐
吾川郡名野川村に
生まれた
紙くず拾いで
生計を立てる貧しい
生活であった
その後
高知市内に移り住み
質屋で質に入った
本を読み漁るようになり
同じ土佐出身の
坂本龍馬に
憧れるようになる

わしは質屋大学で
勉強しよるがよ
いつか坂本龍馬の
ように日本を
変えちゃるき……!
印度白糖
金子直吉の入社後
鈴木商店は神戸有力
八大貿易商の
一社にまで発展

しかし

これからというときに店主の鈴木岩治郎が急死してしまう

このまま廃業か……

やっとここまで大きゅうなった店が

うう…

しかし主なしでは……

一切の責任は私がとる

直どん！好きにやりなはれ

……お家さんっ!!

よねは信頼する金子直吉と柳田富士松の両番頭に一切の経営を任せ鈴木商店を継続することに決めたのであった

一方
岩井商店の
岩井勝次郎は
京都府亀岡旭町の
蔭山家に生まれた

早くに父を亡くし
家計を支えるため
僅か十三才で
大阪に丁稚奉公に出た

お母さん
いつか大商人に
なります

勝次郎の奉公先は従兄が
文久二(一八六二)年に
創業した
加賀屋岩井文助商店
であった

本日よりお世話に
なります！

ここは
雑貨船来商といってな
長崎から入ってきた
異国の商品を扱うんだ
しっかり働け

はい！

岩井文助商店は
大阪の著名商社として
「中船場の三傑」と
いわれるほどに成長

勝次郎は
文助の娘と結婚し
明治二九(一八九六)年
に岩井商店として
独立を果たした

金子直吉と
岩井勝次郎
この2人が通ったのが
神戸の外国人居留地
である

そこで
目の当たりにしたのは
不平等条約に象徴される
日本の地位の低さ
であった

なんで買い手の
我々が裏口から
入らなければ
ならないんだ！

ううっ……
価格も
あいちゃぁらあの
言い値、治外法権、
関税自主権なし
……

日本は産業を興して
一流国の仲間入りを
しなければならない
でなければ
いつまでたっても
馬鹿にされ続ける！

岩井勝次郎は外国人居留地の商館を通さず海外の商社と直接貿易を開始

岩井サン 海外と直接なんて……我々を通してもらえればあなたが直接買うのと同じ値段で販売します

NO!

我々は日本人のために働いている

人の足元を見て暴利をむさぼるあなたたちとは商売することはできない

高橋さん！外国人はトラストレシート（輸入荷為替）で引き取れるのに

なぜ日本人は洋銀前払いでなければ輸入貨物が引き取れないのですか

横浜正金銀行副頭取 高橋是清（たかはしこれきよ）

外国人と日本人の区別ではない単に君に信用がないからだ

ぐっ……

……ただ

なんとかせねばならぬな

おおっ！

岩井勝次郎は担保を差し出すことで商店として初めて銀行発行の信用状で荷物を引き取った

トラスト・レシートの普及により日本の貿易はより発展していく

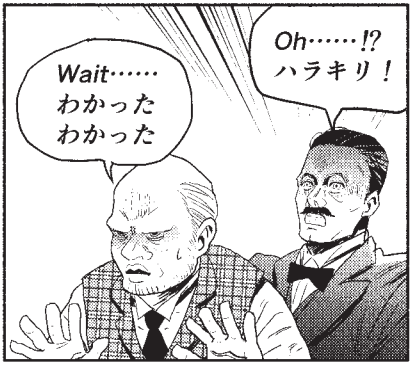
……一方の鈴木商店の金子直吉も順風満帆とはいかなかった

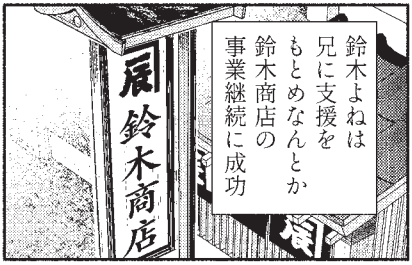
お家さァ……すみません

金子直吉は外国人が樟脳を買い占めて高騰しているのを知らず先物取引で失敗

鈴木商店を破綻させるほどの損失を抱え廃業の危機を迎える

少ないけんど
この示談金で何とか
してくれんかのぅ
無理や言われる
がやったら
今ここで
切腹しちゃるき


Oh……!?
ハラキリ！
Wait……
わかった
わかった


鈴木よねは
兄に支援を
もとめなんとか
鈴木商店の
事業継続に成功
鈴木商店

他人の物を売って
チマチマしよるき
商人は卑しい
言われるがよ
やっぱし
自分らで
モノをつくって
売らないかんわ
お家さんの
ために
世界の鈴木に
しちゃるき
金子直吉は
鈴木よねに対する
忠誠を高めていく

金子直吉と
岩井勝次郎
二人は屈辱を
味わった一方
外国商館で
海外の先進的な
商品とも
出会った

世界で初めて開発された
プラスチック「セルロイド」は
明治元(一八六八)年に
米国で発明され
明治二〇(一八七七)年に
神戸の外国人居留地
22番地の
フランス商館に
初めて輸入された

これが
セルロイド
製品か……
世界初の
プラスチック
なるほど……

蚕ではなく
化学の力で
つくる糸「人絹」
人造絹糸は
明治二五(一八九二)年に
フランスで初めて生産が
開始され翌年に
14番地の英国商館に
初めて輸入された

ほお!これが
化学でつくった
シルクか
この輝き……
これが欧米では
大量生産され
とるのか!

日本で作りたい!
いつまでも外国
頼りではいかん!!

第2章　日本の紡績業の勃興と日本綿花設立

佐野常樹、広岡信五郎・浅子、五代友厚、渋沢栄一
～日本綿花の先駆者たちと関係した財界人

大阪

維新後、政治・経済の中心地が東京に移り江戸時代の経済を支えた大阪商人たちは岐路に立たされていた

そこに現れたのが明治財界の巨頭五代友厚だった

大阪商人は結束しなければなりません！

そのために西洋式の巨大資本を必要とするビジネスをつくりましょう

銀行、鉄道、ガス、そして注目は紡績です

私は薩摩で鹿児島紡績の紡績機械の調達のためにヨーロッパに出かけた

本ビジネスはきっと日本を支えるはずです

大阪商人が再び日本を支えるのです

明治一一(一八七八)年
五代は大阪商法会議所を設立
大阪商人の結束を促した

商法會議所

大阪財界
三巨頭の一人
田中市兵衛も
五代に共鳴

五代はん
感動しましたわ
ここまで
大阪のためを
考えてくれてはる
とは……

さらに
明治一五(一八八二)年
にはあの
渋沢栄一も動いた

華族から出資を募り
大阪紡績(現・東洋紡)を
設立したのだ

これが
合本の力じゃ!

そして
双日のDNAとなる
ある企業も
産声をあげようと
していた——

江戸初期から続く
大阪の豪商・加島屋
広岡信五郎は
加島屋の分家
五兵衛家を継いでいたが
風流人としても知られ
謡の名手であった
カリ
ラ
ラ
「月清さ、夜半とも見えず
雲霧の、かかれば曇る
心なるかな」……

お帰りなさい
また謡遊び
どすか
うむ確かに
謡の集まり
では
あったが
実は尼崎の資産家が
綿花を使って紡績会社を
作りたいので協力を
してくれないかという
相談が謡の師匠経由で
持ち込まれてな
信五郎の
もとには優れた
商才をもつ
女性が嫁いで
きていた
尼崎は広岡家
由緒の地やし
木綿も盛んやった
なんとかして
やりたいけども
……

明治を代表する
女性実業家
として知られる
広岡浅子である
紡績！
ええやないどすか
みんなで
やりまひょうや

みんなて……
謡の仲間を誘え
いうんか

旦那はんの謡仲間は
船場商人がようけ
おらはります
きっとうまいこと
いきます

浅子はこの頃すでに
加島銀行の設立や
炭鉱開発に
深く関わっていた

謡のお仲間も(たまには)
役に立つんだすな

——というわけで
うちの浅子が
こないなことを
言い出した

ほう
面白い話や

浅子さんの
商才は本物や
やろうやないか

福本元之助

木原忠兵衛

俺よりも浅子の方が
信用があるとは……

まあ、商才で
負けるのは認める
謡は誰にも
負けへんけどな

わはは

五代さんも
言うとったけども
いまは大阪商人が
協力せんといかん
時やからな

せや
誰か一人だけ
得をするんでは
あかんのや

共に創るんで
なくては……

こうして明治二二(一八八九)年に尼崎紡績(のちの大日本紡績現・ユニチカ)が設立される

初代社長は信五郎二代目は木原そして第三代目は福本がつとめた

大阪商人たちは結束し一八八二年からの10年間に20もの紡績会社を立ち上げた

全国の綿糸の九割が大阪で生産され「東洋のマンチェスター」とよばれるにいたる

しかし紡績会社が急激に増加し原料である綿花の調達が問題となった

国内の綿花生産は非効率で価格も高いしかも政府は産業保護のために綿花輸入税をかけておる

英国からは機械式で大量生産された綿製品がどんどん入ってきている国内の伝統的家庭内手工業は壊滅的や

これではせっかくの紡績業も外国に勝つこともできん

この問題を解決すべく紡績業界を代表して渋沢栄一が動いた

大隈さん安価な海外綿花が大量に必要じゃ輸入関税もたまらんこのままじゃ日本は綿製品を永遠に輸入し続けなければならん

おうキミはいま紡績協会の顧問もしておるのだったか

農商務大臣
大隈重信(おおくましげのぶ)

そうです紡績業界の皆が綿花をインドに求めたいというのだがいかんせん情報も少なくツテもない政府としても調べてもらえんかのう

そういうことならうってつけの人材がおる

はい

佐野くん

農商務書記官
佐野常樹

この渋沢がいま日本の紡績業にはインド綿花が必要だと言うておるインドに調査団の団長として行ってくれ

わかりましたすぐに準備いたします！

助かります

いやこれは私事ではないからな

すべては日本の近代化のためである！

うむこれなら品質も充分だ

良い報告ができそうだ

佐野常樹農商務書記官を代表とする視察団はこの調査結果を大隈に提出した

しかし、その頃
紡績業界の各社は
海外からの綿花調達を
外国商館に頼らざるをえず

この値段が嫌なら売らない

彼らは暴利をむさぼっていた

そんないくらなんでも高すぎですわ……

こっちはわざわざ日本人に売る必要なんかないんだ！大英帝国が買ってくれるからな

紡績は国の重要産業に発展しようとしとるせやのに原料の調達は外国商館に依存してええんやろか……

やっぱり自分らでやらなあかんのとちゃうか？

大阪商人たちにとっては解決せねばならない問題であった

インド綿の品質は分かったし政府も綿花の輸入関税を何とかしてくれそうやけどこのままではいかんなあ……

それでしたら自分らで「商社」を作りはったらよろしいやないですか

「商社」か……

「商社」といえばなき父上がつくった兵庫商社で「商社」と使うたのが最初かもしれへんな

さいです兵庫商社の設立は小栗上野介様の命やったと伺ごうてます

そうやのう……加島屋はなんでもやってきた大名貸として長州藩にも金を貸し……そういえば新選組にも貸したわ

なんでもやらはったらよろしい思います

……よし呼びかけてみよか

五代さんも言うとった大阪商人の結束が必要や

こうして
明治二五(一八九二)年
摂津紡績、平野紡績
天満紡績、尼崎紡績
4社の首脳陣
そして大阪の有力者
25名が発起人となり
日本綿花株式会社
を設立した

初代社長は
インド綿調査団の
佐野常樹が就任した

ここに
日本人の手による
インド綿と米綿の売買
貿易業を経営しようという
動きが起きてきたが
まだ需要家の要望を
満たすに至っていない

このまま傍観すれば
必ず外国商人が
機に乗じて日本市場を
支配する情勢である

これは
手数料とか諸経費の
得失の問題ではなく
わが国の基幹産業として
発展途上にある

綿糸紡績業の命運を
左右する重要問題であり
われわれが会社を
設立する使命でもある

パチ
パチ
パチ
パチ
パチ
パチ

やったるぞーっ!!

おおーっ

日本綿花の本社は中之島に設立される

その場所は亡くなった五代友厚邸の隣地であった

旦那さんここからが本番ですなあ

うむほうやな

五代さんも見守ってくれはる絶対に成功させよ

おおもちろんや

五代友厚の蒔いた種は芽吹き、大きく育ってゆく

大阪商法会議所は明治二四(一八九一)年に大阪商業会議所に改組

発起人50人のうち10名は日本綿花の発起人であり

その後も会頭は日本綿花の発起人が多くつとめた

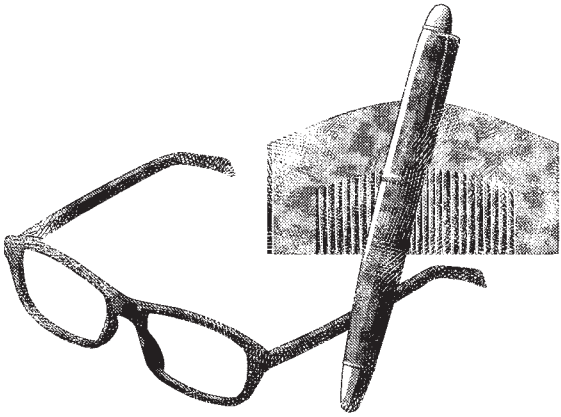
江戸時代から日本を支えた大阪商人が五代の呼びかけによって結束

そして彼らは新たな産業に挑戦し海外にも目を向けていくことになった

日本綿花の設立はまさに新時代の象徴であったといえよう

第3章

日清戦争勃発〜台湾進出と鈴木商店・岩井商店によるセルロイドの国産化



後藤新平、セルロイド・薄荷（ハッカ）
～台湾進出のキーマンと製造事業進出時の商品

樟脳は当時
防虫剤・医薬・香料など
に使われていたが
爆薬原料
そしてセルロイドの
原料として需要が
高まっていた

クスノキは
東アジアの一部に
しか自生せず
なかでも
台湾が一大産地と
なっていた

明治二七(一八九四)年
日清戦争が勃発

翌年
日本の勝利に終わり
下関条約が締結される

くっ
わが大清帝国が
小国に敗れる
とは……

北洋大臣直隷総督
李鴻章

樟脳の一大産地が
日本の領土となった

台湾は樟脳の
一大産地
さっそく
調査じゃ！

金子直吉は
神戸の後藤回漕店
そして樟脳業者と協力
台湾調査に乗り出す

台湾　基隆

ここが基隆……
日本の新たな
開拓地かえ

金子はん
そろそろ土佐なまり
卒業しませんか？

台湾総督府
そうやな 後藤新平閣下に お会いするとやったら 土佐なまりは 控えるか……
閣下 今後の台湾開発には 莫大な資金が必要です 反対派もいますが 樟脳は閣下の構想の通り 専売制にすべきです
なんだ わざわざ神戸から それだけ 言いにきたのか?
台湾総督府民政長官 後藤新平
……わが 鈴木商店は――
樟脳油を 引き取りますよ
なんだと? 樟脳油は 生成のときに出る 副産物だろう あんなものは 捨てているはずだ

そこが鈴木商店流でして……

樟脳油再製開発計画

われわれは台湾で捨てられている樟脳油を神戸で再製樟脳として

宝にしてみせますぞ

ほぉ……なかなかおもしろいやつだな

わかったやってみろ

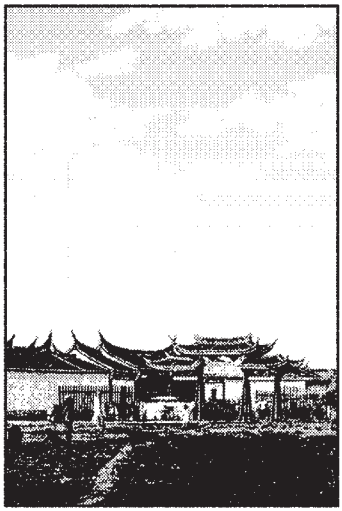
明治三三(一九〇〇)年鈴木商店は神戸で樟脳工場(現・日本精化)を立ち上げる

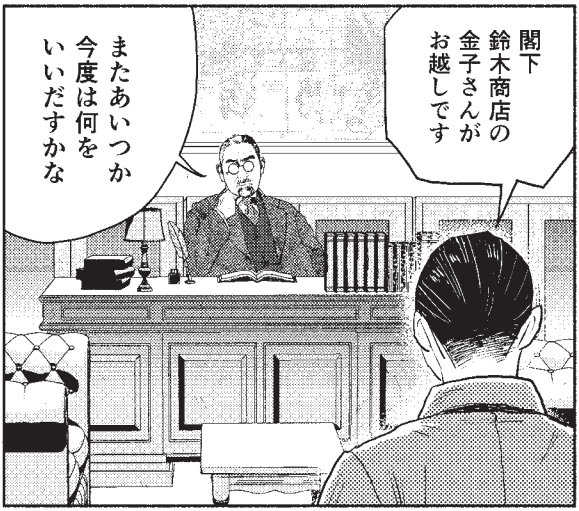
これが鈴木商店で初めての製造事業じゃ

これからは
自らモノをつくって
この国を豊かにする

わしが鈴木の
名を高め
日本を変えてやる

そして樟脳は
神戸の有力な輸出品
にまで成長した





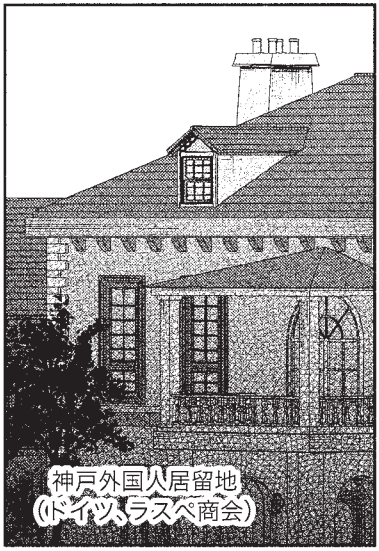
お任せください
内地では財閥系の
銀行が幅をきかせて
いますが

閣下の構想した
台湾銀行の発展に
この鈴木
大いに気張ります

鈴木商店は
台湾銀行をメインバンク
として資金を調達

台湾では精糖、塩田
木材、発電など大規模に
事業展開し

後藤新平と金子直吉の
関係も深まっていった



……Menthol
ハッカ(薄荷)

どうぜよ!?

はい!
ハッカはアメリカの中部と
日本の北海道・三陸地方
でしか採れないそうです!

よし!
全国からハッカの
葉をかき集めろ
そして神戸で
良質なハッカ油
にして世界中に
売っちゃろう!

明治三五(一九〇二)年
神戸で薄荷工場を
設立(現・鈴木薄荷)

おー
爽快な匂いが
しなさんな

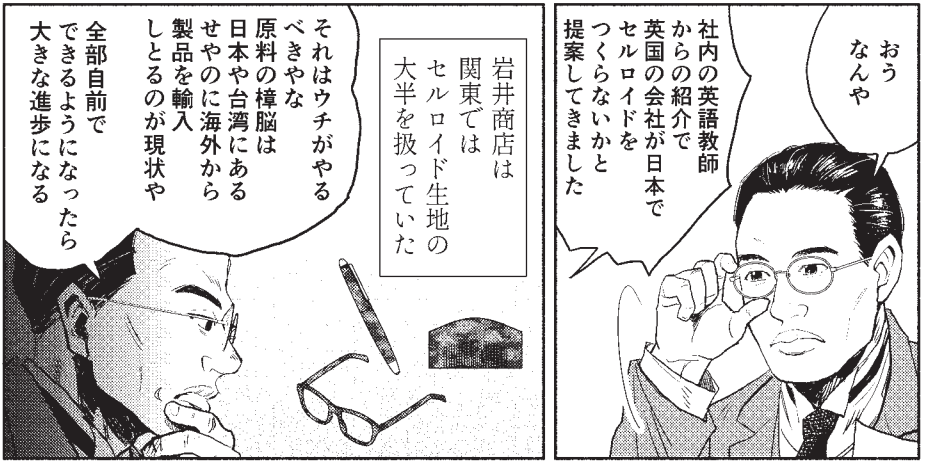
鈴木ブランドは
特等品として
世界中で好まれた

ええか
こうやって
日本にしかない
ものを自分で作って
海外に売るんじゃ!

おうっ!

金子直吉と同様に岩井勝次郎も奮闘していた

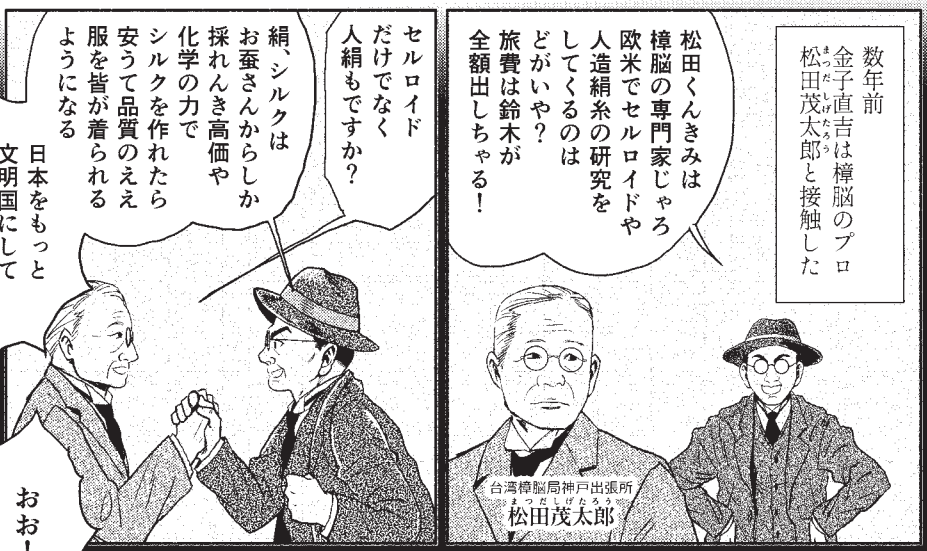
明治三五(一九〇二)年には北浜に本社ビルを構えた



セルロイド工業こそ将来の日本を繁栄させる有力な方法

この機を逃すな！台湾の専売局に原料の確保を打診するんや

ここで金子直吉と岩井勝次郎が交わる——



よっしゃ
研究が成功したら
樟脳は鈴木商店に
優先的に回して
もらうよう後藤さん
に言うておく

金子さんは
商機を逃さない
怖いお人だ

……と
いうようなことが
あったようで

さすがは鈴木商店
さすがは
金子直吉さんや

どないします
諦めますか？

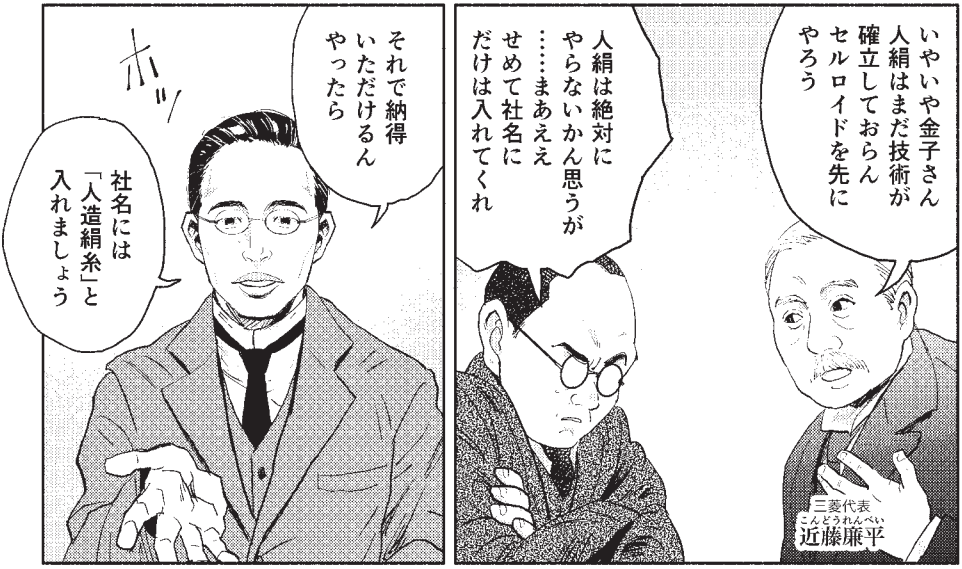
いや
セルロイド事業は
巨額の資本が必要や

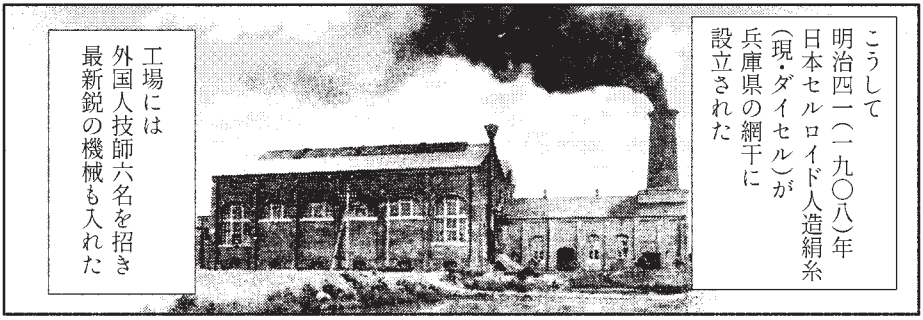
鈴木といえども
一社では無理やろう
いっそ三菱も
巻き込んで
大がかりにやら
ないといかん！

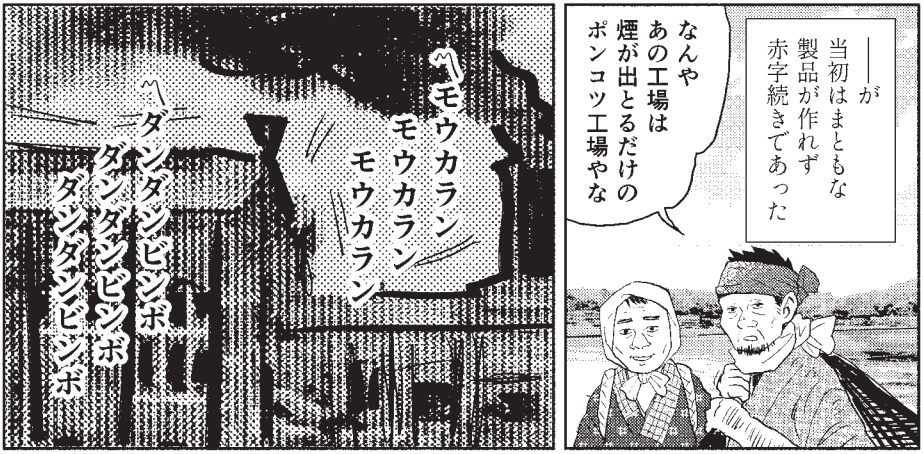
そうして
交渉の場が
設けられた

三社で手を組んで
ぜひとも事業を
成功させたい

……条件がある
セルロイドだけやのうて
樟脳から人絹をつくることも
会社の目的にしてくれ


いやいや金子さん人絹はまだ技術が確立しておらんセルロイドを先にやろう
人絹は絶対にやらないかん思うが……まあええせめて社名にだけは入れてくれ
三菱代表
近藤廉平
それで納得いただけるんやったら
社名には「人造絹糸」と入れましょう


こうして明治四一(一九〇八)年日本セルロイド人造絹糸(現・ダイセル)が兵庫県の網干に設立された
工場には外国人技師六名を招き最新鋭の機械も入れた


——が当初はまともな製品が作れず赤字続きであった
なんやあの工場は煙が出とるだけのポンコツ工場やな
モウカラン
モウカラン
モウカラン
ダンダンビンボ
ダンダンビンボ
ダンダンビンボ

セルロイドに賭ける勝次郎は座視しなかった

えぇい経営陣も外国人も全員クビだ！岩井商店から人を送って日本人だけで経営を立て直す！

そもそも工業いうんは経営者と技術者と職工この三者の息がぴったりと合わんとあかん

外国人の技師を雇ったからといってうまくいくもんやない！

勝次郎は幹部の西宗茂二を工場長として派遣

工場再建を引き受けてくれ

ただし狭い日本国内だけを相手にしていたんでは大きな発展は望めへんどんな苦労があろうとも海外に輸出することを重点においてくれ

わかりました微力を尽くします！

夜中は電燈を消せ節約した分利益が大きくなる

岩井中心の経営再建が功を奏し日本セルロイド人造絹糸は一気に軌道に乗る

岩井商店は製品の輸出も手がけKB（加賀谷文助＝岩井文助商店の屋号）マークの製品は主要輸出品として世界中で販売された

現在のダイセル網干工場には同社創業90周年を記念して設立されたモニュメントがある

「明治四十一年（一九〇八年）、この網干の地に、三菱・岩井商店・鈴木商店の出資により、日本セルロイド人造絹糸株式会社が設立された。我が国セルロイド、ひいては化学工業の本格的工業化時代のさきがけをなすものであり、当地は、当社並びに日本のものづくりの原点ともいえる場所である。」

さすがは岩井商店やけんどわしは人絹を諦められん
昔から絹の洋服を着たいちょいう庶民の夢「お蚕ぐるみの夢」を化学の力で叶えたいんじゃ……
金子直吉の人絹への情熱は半端ではなかった
日本セルロイド人造絹糸（現・ダイセル）工務部長
西田博太郎
おい、西田工務部長近藤さんの手前大けな声ではいえんが人絹の製造研究を進めといてくれ
神戸樟脳専売局の技師
おいっ、君渡欧資金は鈴木が出すから人絹の研究をやってくれ
えっ……はい！わかりました
そんな折ある人物が金子直吉のもとに訪れる
おうよう来たまあ座って
彼は自分を訪ねてきた人物とは誰でも面会したという
神戸専売局の秦逸三といいます
東京帝国大学応用化学科を出て樟脳専売局や神戸税関に勤めましたが自分の能力を活かして何かやってみたい
何かおもしろい仕事はありませんか？
……では人造絹糸を研究してみてはどうじゃ？
この秦との出会いが人絹事業を大きく推し進めることになる
しかし、事業化までにはまださまざまな困難が待ち受けていた

金子さんのところにはいろんな人がこられますなあ

金子はんに会うたら皆心を奪われてしまうんじゃあの人は稀代の人たらし

人絹、人絹とものすごいこだわりやけどあの人は信念の人やから絶対やり遂げるで！

それに自分のことなんかまったく考えとらんのがすごいどうしたら国民が豊かになるかばっかり言うとる

網干の工場あるやないかあれを軌道に乗せた岩井勝次郎さんも同じらしいな

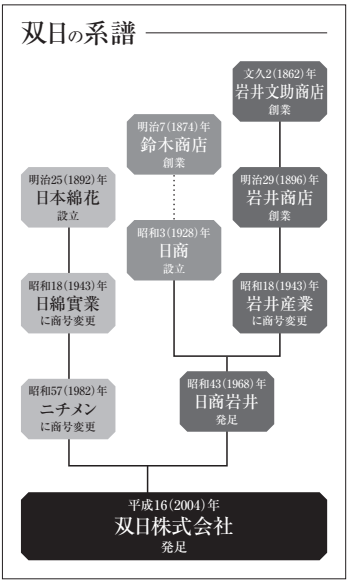
若い学者さんの声をよく聞くらしい謙虚で信念もある同じ商人志は一緒だわな

それを言うたら加島屋さんらが大阪で立ち上げた日本綿花あれもそうや志で商売敵が手を組む時代なんや

ワシらはいま新しい時代を生きとるんやな……

日本における産業革命は苦難を伴いながらも続いていく

160年以上の歴史を受け継ぐ新しく伝統ある双日
～総合商社としての原点に立ち返る



2003年、ニチメンと日商岩井が経営統合し、翌年2004年、双日として発足した。日商岩井は、文久2(1862)年に創業された岩井文助商店、明治7(1874)年に設立された鈴木商店が源流であり、ニチメンは明治25(1892)年に設立された日本綿花を出発点としている。

鈴木商店と岩井商店は、現在に続く代表的な製造業を次々と設立し、日本綿花は世界各地での綿花の調達と綿製品の販売のために、日本の海外進出の尖兵として活躍した。双日は、開国後、最も日本が輝いた明治・大正の産業革命期に、日本の礎づくり、モノづくりに奔走した商人の起業家精神、フロンティア精神を受け継いだ総合商社といえる。そして、先人から受け継いだ顧客、商品、スピリッツといった有形無形の資産を高度化し、また新たな領域で挑戦している。

2021年の統合報告書の中で社長の藤本は、「総合商社としての原点に立ち返る」とし、先人の偉業を例に、今こそ世の中の変化を捉え、これから旬を迎える新しい事業、新しい土地に投資し続けていかなくてはならないと決意を述べている。また、現在の双日について、強い責任感のもと、マーケットの課題を取り上げ、解決策を提案していける能力を個々人が持ち、組織としては風通しの良さとスピードを重んじる社風であること、これが双日らしさであると紹介している。

代表取締役社長 CEO
藤本 昌義

双日は、2030年における「目指す姿」として、かつて先人が行ってきたように「事業や人材を創造し続ける総合商社」を掲げ、新たな次代を創ろうとしている。

新たな双日のキャッチフレーズ「Hassojitz（ハッソウジツ）」

Hassojitz

双日は、2004年の発足時にグループスローガンである「New way, New value」を掲げ、従来に捉われない新たな発想で、新たな価値を生み出す商社を目指してきた。そして2018年からは、発想を実現する商社として、「発想」、「実現」そして「双日」を掛け合わせた造語「Hassojitz（ハッソウジツ）」をキャッチフレーズに企業広告として展開。

双日における「さらなる成長」を考え、未来構想力や戦略的思考を定着させるべく、2019年より新規事業創出プロジェクト「発想×双日プロジェクト（通称：Hassojitzプロジェクト）」を開始。経営陣や外部有識者による審査を通過した“発想”は数ヵ月かけて事業化の道を探るもの。有望な事業アイデアには、双日として出資も検討、起業して独立することも後押しする。今までの延長線上にない事業を生み出し、企業としてさらに成長するためであり、先人のような起業家精神を活性化させるための取組みでもある。2020年には、本プロジェクトの第1号出資案件として、電気自動車インフラ事業の開発に向けASF株式会社と資本業務提携をするなど、発想を実現している。

鈴木よねと広岡浅子
～二大女傑と双日の女性活躍推進

大正元（1912）年10月22日の東京朝日新聞には、「女子の発展」と題して、「西に廣岡浅子、鈴木米子（よね）の事業界に雄飛して、男子の実業家と雁行し、若くは之を凌駕せるあり。」と二大女性実業家として二人を並べて紹介している。

（第三種郵便物認可）　大正元年十月二十二日　東京

女子の發展

明治維新の頃は女子は家庭の人にして、一穂の灯燭を掲ぐべき婦人なりしも、七去三從の教へに從ひ、女子の尾扇を掲ぐべき時代に在りては、一家の女子の一家は、家者に對して、一家の女子の發展は、家庭の外に言ひて、一般は家庭に從ひ、家庭に對して、一般は家庭に從ひ、家庭に對して、一般は家庭に從ひ、家庭に對して

大阪名門豪商による「共創」「共有」の象徴
～現・大阪商工会議所と日本綿花

鈴木商店と岩井商店は、ともに個人商店として発展したが、日本綿花は大阪の豪商を中心に25名が発起人となり、株式会社形態によって設立された。それぞれ異なる業種の豪商が、新産業の共創に向け手を組み、人脈、情報、知恵を共有した。その舞台が、五代友厚が提唱して設立された大阪商法会議所、現在の大阪商工会議所であったかもしれない。日本綿花設立の1年前に大阪商法会議所が大阪商業会議所に改組され、その際の発起人50人の内、10人が日本綿花の発起人と重なっている。

大阪商法会議所

双日の中期経営計画2023では、「共創」と「共有」の実践を掲げている。これは双日グループ内のリソースの活用だけではなく、かつて大阪の豪商が手を取り合い、外国という大阪商人にとって未知の世界に挑戦するために日本綿花を設立したように、パートナーとの協力により新たなビジネス領域に挑戦しようとしている。

■ 日本綿花発起人の群像

発起人の特徴として、両替商、木綿・絹・綿・足袋商、呉服問屋といった繊維関係商人、綿花栽培用の干鰯などの肥料を販売していた肥料商など、さまざまな業種の商家が参画している点が挙げられる。

両替商の代表格は、寛永2(1625)年創業で、三井・鴻池と並び日本屈指の豪商であった加島屋広岡家。幕末に神戸港が開港した際、幕臣・小栗上野介が鴻池や加島屋といった大阪商人に貿易会社である兵庫商社の出資と設立を命じ、加島屋当主・広岡久右衛門(正饒)ら3名が初代頭取に就任した。「商社」という言葉は、この兵庫商社が初めてといわれている。

加島屋(提供:大同生命保険)

日本綿花発起人のレリーフ

また、両替商としては、広岡信五郎の謡仲間の木原忠兵衛の銭屋がある。大阪財界三大巨頭といわれた田中市兵衛、そして金澤仁兵衛が営む干鰯商・肥料商は、綿花栽培用の肥料を販売していたと見られる。

日本綿花の発起人らは、銀行業にも積極的に進出し、発起人たちが設立した多くの銀行は、昭和8(1933)年に設立された三和銀行(現・三菱UFJ銀行)に合流していく。岩井商店の創業時からの取引銀行で、岩井勝次郎が役員を務めていた山口銀行も三和銀行設立母体の一行であり、こうした背景もあり、ニチメン、日商岩井両社、そして現在の双日も旧三和銀行の取引先企業によって構成されている「みどり会」のメンバーとなっている。

鈴木商店の台湾進出と現在の台湾事業
～楠・樟脳から洋上風力へ

鈴木商店の金子直吉は、鈴木商店とほぼ同時期の明治10（1877）年に創業した神戸の後藤回漕店の縁により、台湾総督府後藤新平との知遇を得て、樟脳油の販売権を取得し、その後、鈴木商店は台湾での事業の多角化を行っていく。特に砂糖分野では、台湾五大製糖のうち、東洋製糖、塩水港製糖と資本関係を構築し、また、大日本製糖の原糖も取り扱い、台湾産原糖の3分の1を取り扱うなど大きなシェアを誇った。

大蔵省専売局とは樟脳以外に塩を取り扱い、内地への塩の販売を鈴木商店が出資する大日本塩業（現・日塩）が取り扱った。その他にも発電、石炭、木材、不動産開発など多岐にわたる事業を展開した。大正5（1916）年の台湾勧業共進会の写真が現在でも残っており、鈴木商店の当時の盛隆を垣間見ることができる。

台湾勧業共進会の鈴木商店のパビリオン。右側のオブジェは鈴木商店が製造販売するサクラビール

鈴木商店台湾懇親会（大正6（1917）年、北投にて）。右上は鈴木よね

IHI相生事業所（旧・播磨造船所）に現存する鈴木商店時代の倉庫上部の米星

1981年に日商岩井・台北支店が発足するまでの24年間は、台湾の取引は、米星商事（べいせい）の名で行っていた。米星とは鈴木商店の社章にもなっており、鈴木よねの「よね」を米とし、星の形に似ていることから米星（よねぼし）といわれた。

現在の双日は、液晶などの電材、各種化学品、触媒などの工業用資機材、そして電気銅などの非鉄金属を中心とした取引を行い、2019年には、台湾最大級の洋上風力発電事業（640MW）に参画を発表、今後長期にわたり電力を供給することになる。

台湾の天然資源を活用した樟脳事業から始まった双日の台湾ビジネスは、今、台湾の自然エネルギーを活かしたクリーンな事業に挑もうとしている。

台湾最大級の洋上風力発電事業に参画（2019年）
（copyright of and with permission by Yunneng Wind Power Co., Ltd.）

鈴木商店と岩井商店のセルロイド事業と双日のメタノール事業

インドネシアKMI社のメタノール製造プラント

双日の化学品主力事業会社として、1998年に商業生産を開始したインドネシアのKMI社（PT.Kaltim Methaol Industi／双日の出資比率85%）がある。同国唯一のメタノール製造工場として、日本およびアジア各国に輸出し、同国の天然ガスの高付加価値化と経済発展に大きく貢献している代表的な事業といえる。実は、このメタノールの事業は、鈴木商店と岩井商店が三菱と兵庫県網干に設立した日本セルロイド人造絹糸（現・ダイセル）、そしてセルロイドと密接な関係がある。

セルロイドは、セルロース誘導体である硝酸セルロースから、樟脳を可塑剤として製造される熱可塑性樹脂であるが、硝酸セルロースが燃えやすいという弱点があった。セルロイドメーカーであったダイセルは、その難燃化の取組みとして、主要原料の硝酸セルロースを酢酸セルロースに転換する研究を進め、酢酸からの一貫生産体制を確立。セルロイドに代わるアセテートプラスチックスを事業化する一方、酢酸が医農薬などさまざまな化学品原料となることから、化学品事業を発展させるとともに、酢酸の製法転換をしながらその製造能力を増強。1975年には当時の最新技術であったメタノール法酢酸技術を導入し、今日では国内唯一の酢酸メーカーとなっている。

双日がインドネシアでメタノールの製造に進出した際には、セルロイド事業を出発点として拡大成長し、化学プラントの建設と運営、そして同製品に知見のあるダイセルに支援を求めた。その後、同社も出資参画（5%）し、また、双日より供給されるメタノールはダイセル網干工場において酢酸の原料として使用されてきた。100年以上前の網干のセルロイド事業は、現在の双日にもつながっているといえる。

2011年には、ダイセルが保有する「日本のセルロイド工業の発祥を示す建物および関連資料」、すなわち鈴木商店、岩井商店時代の功績が、化学と化学技術に関する貴重な歴史資料であるとの理由で、公益社団法人日本化学会から化学遺産に認定された。

創業期に外国人技師の宿舎として建設された「ダイセル異人館」（ダイセル網干工場）

創業期に建設された石炭ボイラー（ダイセル網干工場）

神戸の銘菓・瓦せんべいと鈴木商店

鈴木商店は、鈴木岩治郎が大阪の有力な輸入砂糖商・辰巳屋ののれんを譲り受けて、「カネ辰鈴木商店」として神戸・弁天浜に創業。瓦せんべいで有名な亀井堂総本店は、鈴木商店とほぼ同時期に松井佐助により創業。鈴木商店の砂糖の取引先であり、佐助と岩治郎が店先でよく暖を取っていたという。

金子直吉と土佐

金子直吉は鈴木商店入店前に質屋へ丁稚奉公していた。質屋の主人が裁判沙汰に巻き込まれると主人のために訴訟を起こし、相手方の著名な弁護士を相手に勝訴するなど、金子直吉の商売の骨格はまさにこの丁稚奉公（質屋大学）時代につくられたといわれる。

金子直吉は、同郷の坂本龍馬に憧れ、実母のために龍馬の生家を買い取り住まわせた。現在でも坂本龍馬の生家跡は、金子家が所有している。金子直吉を慕い、多くの土佐出身者が鈴木商店に入店し、彼らは土佐派といわれ、神戸高商卒を中心とした学卒派と鈴木商店の近代化をめぐりしばしば対立した。

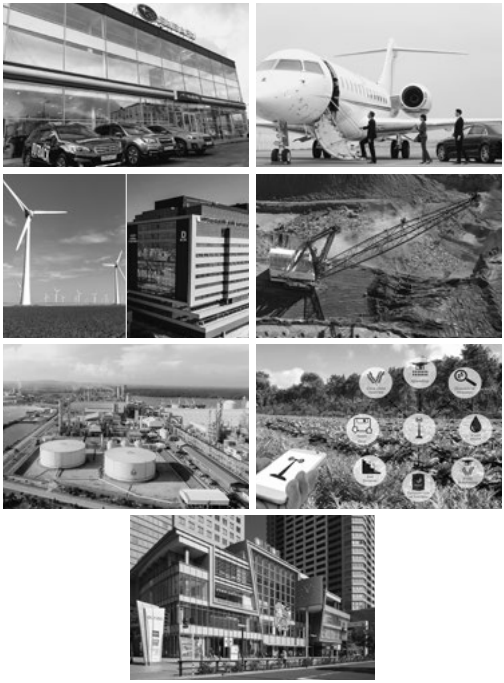
岩井商店の直接貿易の相手は英国紳士

岩井商店は居留地の商館を通さず、英国のウィリアム・ダフ商会と直接取引を開始した。ダフは仕入れ先のインボイスをそのまま岩井商店に送り、正当な利益しか得ていないことを示した。勝次郎は公正な取引とその姿勢に感動し、事務所内にダフの写真を掲げた。さらに自分の息子の名前にダフと付けようとするも、周囲に反対されて断念したという。

紡績業は薩摩から

島津斉彬が西欧式の技術を習得するため集成館を設立。五代友厚が英国で紡績機械を調達し、日本で初めての洋式紡績工場を設立。集成館は、2015年に世界文化遺産に登録され、日本の産業革命の出発点として位置付けられている。

双日は現在、全世界に400以上のグループ会社を有し、自動車、航空産業・交通プロジェクト、インフラ・ヘルスケア、金属・資源・リサイクル、化学、生活産業・アグリビジネス、リテール・コンシューマーサービスの7本部体制で、広範・多岐にわたる製品の製造・販売や輸出入、サービスの提供、各種事業投資などをグローバルに展開しています。



Hassojitz

総合商社 双日 未来を創造した先駆者たち
～第1巻 創業～

2022年6月　第1刷発行
発行　双日株式会社
〒100-8691
東京都千代田区内幸町2-1-1
画　すずきんかりお
関連サイト　https://www.sojitz.com/special_site/pioneer/

無断複写・複製・転載を禁じます

本マンガ制作にあたっては、本巻に登場する多くの取引先企業、鈴木商店記念館、大阪企業家ミュージアムの皆様にご協力いただきました。
厚くお礼申し上げます。

sojitz

New way, New value

本マンガは、双日のWebサイトに第1巻より順次掲載していきます。
https://www.sojitz.com/special_site/pioneer/